

2020年
3月9日号 No.1559



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

潮流

目と身体と脳をつなぐ トレーニングを①

一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会代表理事 久保田実希



資料

①平成30年度におけるがん教育実施状況調査

—文部科学省

②「インクルーシブ教育システムにおける障害のある 子供の学びの場の在り方に関する議論の整理(案)」

—新しい時代の特別支援教育の
在り方に関する有識者会議

CONTENTS

▶ 2 潮流

目と身体と脳をつなぐトレーニングを①

久保田実希(一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会代表理事)

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○臨時休業時の教育課程でQ&A

編集部

○がん教育、小56%、中71%、高64%が実施

編集部

▶ 8 校長講話

進級・進学、地球環境への関心を高める講話

小川深雪(東京都文京区立林町小学校校長)

▶ 10 管理職養成 教頭実務ガイダンス

かけがえのない存在③～子どもの感性を大切に～

多久知明(新宿区立新宿西戸山中学校副校長、全国公立学校教頭会会長)

▶ 12 『つまずき』に学ぶ学校づくり

つまずけない組織の罨①

～VUCAワールドと「大船の思考」～

武井敦史(静岡大学大学院教授)

▶ 14 管理職必携 安心・安全の新常識

第三の歯科疾患「あごこり」(顎関節症)の原因と予防法④

どうして「あごこり」になってしまうのか

小見山 道(日本大学松戸歯学部顎口腔機能治療学分野 教授)

▶ 16 特別資料

児童生徒等に新型コロナウイルス感染症が発生した場合

の対応について(第二報、令和2年2月25日時点)ほか

▶ 19 資料

①平成30年度におけるがん教育実施状況調査

文部科学省

②「インクルーシブ教育システムにおける障害のある

子供の学びの場の在り方に関する議論の整理(案)」

新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議

▶ 35 教育の危機管理

新型コロナウイルス感染症への対応

鬼頭英明(法政大学スポーツ健康学部教授)

▶ 38 事務新時代

学会リポート⑩

あらゆる視点から新たな「業務改善」に迫る(続き)

～九州・沖縄ブロック地域研究集会

日力雅史(日本教育事務学会 in 北九州実行委員長)

▶ 40 高校現場最前線

サイエンスの力でグローバルに活躍するサ

イエンスエリート育成⑤

永瀬 哲(横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校校長)

▶ 42 若手教師に伝えたい

「学級・授業づくり」とっておきのツボ

友だちとの絆を深めよう

～友だちの名前漢字テスト&いいところ寄せ書き～

依原正仁(兵庫県芦屋市立宮川小学校校長)

▶ 44 変わる教育委員会

教育・子育てなら山口④

藤本孝治(山口市教育委員会教育長)

▶ 45 教育問題法律相談

家庭裁判所調査官の調査(少年事件)

角南和子(弁護士)

▶ 46 現場の課題に応える教育センター

三重県における教育相談体制の充実に向けた取組⑦

吉村元宏(三重県総合教育センター、三重県教育委員会事務局次長)

▶ 48 BOOK

『壊されゆく子どもたち』

『事例で学ぶ発達障害の法律トラブルQ&A』

▶ 49 自著を語る

『OPENNESS 職場の「空気」が結果を決める』

北野唯我(株ワンキャリア取締役/最高戦略責任者)

▶ 50 今さら聞けない!? マナーと常識

彼岸の思想

柴崎直人(岐阜大学大学院教育学研究科准教授)

▶ 51 データで見る教育

多様な高校教育の取組例①・②

▶ 52 マイオピニオン

教科書の定番小説は今なお光輝く

平野啓子(語り部・かたりすと)



一般社団法人日本ビジョントレーニング
普及協会代表理事
くぼたみき
久保田実希さんに聞く①上

潮流

目と身体と脳をつなぐ トレーニングを

従来は遊びの中で獲得してきた諸感覚が
十分に育っていない子どもが増えている。

目と身体と脳（思考）をつなぐ
トレーニングの場と機会が求められている。

眼を鍛えて脳を活性化

「ビジョントレーニング」は、眼の諸機能（視覚機能）を鍛えることによって、脳を活性化させ、視空間認知能力を向上させるとともに、人間が本来持っている集中力や判断力、情報処理能力など、さまざまな能力を高めていくプログラムのこと。欧米では80年以上前から試みられてきたもので、アスリートやプロスポーツ選手の能力発揮などにも活用されてきたが、子どもの注意欠陥多動性障害（ADHD）や学習障害（LD）、読み書き障害（ディスレクシア）など、発達障害が見られる子どもたちの課題改善・克服にも活用されるなど、発達支援の実践プログラムとしても注目されている。

久保田 私の親族に発達のおつまずきがある子どもがいて、2015年にビジョントレーニングをマンツーマンで受けたところ、効果がありました。私自身も実家が眼鏡店だったこともあって、ビジョントレーニングそのものに興味を持って学びましたが、まだ日本では歴史のあるプログラムですが、まだ日本ではほとんど知られていません。発達障害のある子どもにとっても有効なプログラムであると確信できましたので、このプログラムを普及させることが、子どもたちの未来を変えるこ

とにつながると考え、もっと世の中に広めたいと2018年に一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会を立ち上げ、大阪府大東市で活動を始めました。

同協会では「Best Vision（ベすとびじょん）」という子どもの心と身体を育てる独自のトレーニング方法を同協会の横田幹雄理事と共に開発してきた。ビジョントレーニングは、眼球運動をはじめとする視機能のトレーニングや、目と手や身体、目と頭脳の連動など体幹の柔軟さやコンディショニングなどが主な内容になっているが、それにメンタルトレーニングとキャリアコーチングを組み合わせたのが「ベすとびじょん」のメソッドとなる。これまで、発達がゆっくりな子どもや視覚に障がいがある子ども、ジュニアスポーツチームからプロスポーツ選手まで多方面分野で活用されている。最近では、子どもの保護者や保育園など幼児教育や小学校の先生たち放課後などデイサービスの関係者、スポーツ指導者などへの、ビジョントレーニングの指導者（トレーナー）としての育成にも力を入れているという。

久保田 実際にビジョントレーニングをしてみると、子どもたちの様子から多くのことに気付きます。特に子どもだけでなくその親など保護者がビジョントレー

ニングの考え方や知識を持つことで、できていないことで子どもを叱らないで済みますし、目の前の子どもにも何が起こっているのか、より良い子育てのために何をすべきかが理解できるようになります。子育てでは、学校や子どもを支援する機関だけに任せるのではなく、まず親たちが免許や資格がなくても子どもをサポートできることがたくさんあることに気付くことが大切ではと思っています。

五つの感覚機能を育て、つなげる

人は幼少期からさまざまな体験を通して、感覚の刺激を得ながら自分の体の使い方や動きの感覚を培う。ところが、最近では公園などから遊具が撤去されたりして、豊かな感覚を培う機会が減ってきている。ビジョントレーニングでは、平衡感覚・固有感覚・触覚の三つの基礎感覚に加えて、視覚と聴覚機能の五つの感覚機能を育てること、視空間認知の発達や目と手の協調性、言語機能の発達などを促すことをねらいとしている。その結果として、集中する力や読み書きする力、運動能力の発達など、さまざまな能力が養われることにつながり、学校などでのまとまった学習のベース（土台）を作ることになる。

久保田 日本では視力検査はありますが、

視覚検査が制度化されていません。つまり目には見えていても、その意味を理解できているかのチェックまではしていません。私たちの場合、最初に1分ほどで「追従」のチェックをしたりします。これは子どもの目の前に対象物（赤いボール）を置いて、縦・横・斜めに動かしてそれを追いかける眼球の動きを見るものですが、この時に対象物の追従が十分にできていない子どもは、学習の土台ができていない状態であると考えています。

子どもの視覚認知の状態を最初に判断する場合、このほかにペンの持ち方やスキップができるかなど、視覚認知だけでなく手の動きや身体全体の動きがうまくつながっているかどうかを見ている。また、床の上に線を引いて、その線の上を前に歩いた後に、そのまま後ろ歩きをすることが苦手な子どもが増えている現状がある。目には見えない後ろの線をイメージして身体を動かすことができないのだ。実は、こうした子どもの多くは算数の「引き算」が苦手であることが多いということが、経験的に分かってきたという。

久保田 小学校の入学時に視力検査などを行います。先ほどの「追従」のような眼球の動きや、目と手や身体が協調的に動かすことができるかなど、簡単なチェ

ックでその子どもの苦手な部分が分かりますので、視覚検査を含めて認知的な課題がどこにあるのかを確認できるような検査にしてほしいと願っています。

また、ビジョントレーニングについて学校の先生方を対象とした研修会を、大阪府では現在、大東市、泉大津市、富田林市の教育委員会の主催で実施しています。視覚認知を含めて課題を抱えている子どもの様子は、日頃から日常的に接している先生方が客観的に理解できる立場にあると思います。実際に研修会では、私たちが接している子どもたちの現状についてビジョントレーニングを行って、どのように学習に向かうためのベースが改善されているかを話しますと、「そうか、だからあの子どもはこうなのか」と納得していただけるようです。

昔の遊びで培われてきた力

ビジョントレーニングで重視している基礎感覚の一つである「固有感覚」とは、体の位置や動き、腱や筋肉の力に関する感覚のことで、例えば、まりつきのように「ボールを10回つく」という動作では、力の入れ具合をそのつど調整していくことが必要になる。この固有感覚が育っていないと、

日常生活の中で「キレやすい」状態になりやすいという。この感覚は昔から友達との外遊びを通じて培われることが多かったが、最近はゲーム機など無機物のスイッチを押すだけで、力の入れ具合を調整するような機会が減ってきている。

久保田 おはじきとかビー玉、メンコ、ゴム跳びやあや取りなど、昔からの遊びがほとんど見られなくなっています。このほかにも平衡感覚などを培う遊具なども身近な公園などからなくなりつつあります。こうした基礎感覚を統合して体感する機会が減ってきたことも問題の背景にあると考えています。また、視覚からの認知に基づいて、判断力や瞬発力、バランス感覚や対応力、手先の器用さなど、生きていく上でのさまざまな力を「統合」していく力が必要になります。昔は遊びの中で培われてきたこうした力を、トレーニングとして意識的に育てていくことが必要になってきているわけです。

先にも述べたように、同協会が設置しているスタジオに初めて参加する子どもには、視覚のチェック、身体のチェック、方眼用紙に図形などを描く作業をしてもらって、その子どもの苦手な分野や得意な分野などを確認するようにしている。発達に課題があ

る子どもの場合、「追従」のような簡単な目の使い方ができていないことが多いという。また、簡単な図形（三角や四角、平行四辺形など）の模写などが、できていない子どもの場合、図形の認知がうまくできていないこと、さらにはアウトプットする力が十分には付いていないことが考えられる。

久保田 ビジョントレーニングの開始時や一定期間後の状況などを確認するために、大阪医科大学のLDセンターの先生が監修したアセスメントを使わせていただいています。模写では空間認知の状況をチェックできますが、この力が十分でない、日常生活においても、身の回りのものを片付けていく力が育たなかったり、方向音痴になって迷ってしまうなどの問題につながるおそれがあります。

私たちは、すべての子どもにビジョントレーニングができる社会を目指したいと考えています。その一環として、例えば学校の先生方なども含めた養成講座で、すぐに現場で活用できる実践的なスキルの習得ができる場を設けていますので、お問い合わせをしていただければと思います。

一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会 || <https://ivision.jp/>